

# 「ロンドンオリンピックにおける選手育成・強化・支援等に関する検証チーム」報告書概要

## ロンドンオリンピック競技結果

### 【メダル・入賞結果】

金メダル: 7  
銀メダル: 14  
銅メダル: 17

計38

史上最多

4～8位: 42

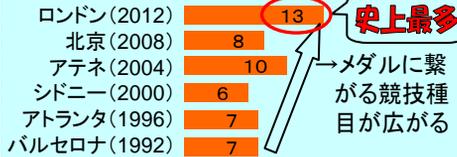
計80

史上最多

### 【スポーツ基本計画の目標】

- ・過去最多を超えるメダル数の獲得→38 **達成**
- ・過去最多を超える入賞者数→80 **達成**
- ・金メダルランキング5位以上→11位 **未達成**

### 【メダル獲得競技数】



## 検証チーム

### 【開催】

H24 9/25、10/10、10/24、11/14

### 【構成】

- ・朝原 宣治 (一社)アスリートネットワーク副理事長
- ・北村 信彦 公認会計士
- ・柴田 亜衣 アテネオリンピック金メダリスト
- ・平尾 誠二 神戸製鋼ラグビー部ゼネラルマネージャー兼総監督、特定非営利活動法人スポーツ・コミュニティ・アンド・インテリジェンス機構理事長
- ・平野 祐司 (一社)日本トップリーグ連携機構事務局長
- ・間野 義之 早稲田大学スポーツ科学学術院教授
- ・宮嶋 泰子 (株)テレビ朝日編成制作局アナウンス部兼編成部上級マネージャー
- ・山口 泰雄(座長) 神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授

### ※協力員

- ・上村 春樹 (公財)日本オリンピック委員会常務理事
- ・河野 一郎 (独)日本スポーツ振興センター理事長

## 3事業の効果等

### ①国立スポーツ科学センター(JISS)

#### 【スポーツ医・科学支援事業】

- 情報技術者の登用により、短時間で有効な情報をフィードバック。
- 計画を十分活用し、競技成果をあげている。

#### 【スポーツ医・科学研究事業】

- 研究成果をマルチサポート事業に活用。

#### 【スポーツ診療事業】

- 受診件数がH20の13,066件からH23の15,210件に増加。
- オリンピック前のコンディション調整、外部と切り離された空間でリハビリに専念。

△スタッフの定員枠や任期制などによる担当者の途中交代が課題。

### ②ナショナルトレーニングセンター(NTC)

#### 【ナショナルトレーニングセンター(中核拠点)】

- 38個のメダルのうち34個が、NTC中核拠点がある競技。
- 優先利用できる専用施設の整備により、合宿等、長期間、集中的・継続的なトレーニングができるようになった。
- JISSとの連携により、効果的な質の高いトレーニングが可能となった。
- アスリートヴィレッジも主要な役割を果たし、良質な栄養摂取・休息も可能となった。
- どの競技も利用率は7割を超え、365日に近い競技種目もあった。
- 異なる競技団体間の選手・コーチ・監督同士のコミュニケーションなどの交流が進んだ。
- △共用スペースの減少が課題。

#### 【NTC競技別強化拠点】

- 38個のメダルのうち4個がNTC競技別強化拠点がある競技。
- 「常時優先利用できる練習環境は有効」との感想。
- △競技種目の充実や個別の拠点における利用の拡充が必要。

隣接しており、連携

### ③マルチサポート事業

- 38個のメダルのうち35個がマルチサポート事業のターゲット競技種目。
- メダル獲得競技総数13競技のうち11競技がターゲット競技種目。

#### 【アスリート支援】

- 合宿等に支援スタッフがフルタイムで帯同。
- △提供サービスのクオリティのコントロールが必要。

#### 【マルチサポート・ハウス】

- 延べ利用者数4,217名。
- 「リカバリーミール等による栄養管理が有用」「選手村から近くてよかった」等の感想。直前のコンディション調整で大いに効果を発揮。
- △今後、確実にメダルを取るためのアドバンテージを得る機能の検討が必要。

#### 【研究開発】

- 短期間の開発であったが、選手たちによく使用された。
- △現場指導者や選手と研究者との一層の連携が必要。

日常の支援

現地での支援

・3事業がそれぞれの役割と連動した機能を発揮してきたことにより、今大会のメダル獲得・入賞につながった。

・事業の機能の高度化等を図りつつ継続していくため、安定した財源確保が必須。

・2014年ソチ(冬季)、2016年リオデジャネイロ、2020年オリンピック(東京が立候補)に向け国際競技力をより一層向上させる取組に期待。